

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06464

研究課題名(和文) 中世イエメン社会へ流入する人々 新たなる社会秩序の創出と展開

研究課題名(英文) People who flow into the medieval Yemen

研究代表者

馬場 多聞 (Baba, Tamon)

九州大学・人文科学研究院・助教

研究者番号：70756501

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：中世イスラーム世界においては、経済的政治的中心地に様々な人々が流入していたことが既に指摘されている。エジプトやシリアといった往時の中心より遠く離れたイエメンの状況を探る本研究では、関連するアラビア語史料を収集・読解し、他地域との共通性あるいは特殊性を見出すことを試みた。その結果、中世イエメンが対岸の東アフリカより多くの人々を受け入れ、社会における重要な要素として活用していたことを明らかにした。支配者層は東アフリカ由来の家内奴隷や宦官を積極的に活用し、彼らの中には支配体制の高位に登り詰める者も見られた。商人や知識人が行き来していたことも、見逃してはならない。一方で他地域出身者は限られていた。

研究成果の概要(英文)：In the medieval Islamic World, various people flew into the economic and political centers. I gathered and read related Arabic documents to find commonality or specialty of Yemen that is situated far away from the centers such as Egypt and Syria. As a result, it is revealed that medieval Yemen accepted people from the Eastern Africa and utilized them as important elements in the society. The rulers used domestic slaves and eunuchs from East Africa positively, and some of them climbed to a high position. Merchants and intellectuals came to Yemen too. On the other hand, people from other regions were rare.

研究分野：中世イスラーム世界史

キーワード：イエメン ラスール朝

1. 研究開始当初の背景

中世イスラーム世界においては、その政治的・経済的な中心にイスラーム世界の内外より様々な人々が流入していたことが既に指摘されている。彼らは当地の支配体制の中に取り込まれることもあれば、支配者として君臨することもあった。支配者の母親がイスラーム世界の外部からやって来た女性奴隷であるという話は極めてありふれたものであり、中世イスラーム世界の特徴の一端をなしている。エジプトに成立したマムルーク朝の支配者層は、その最たる例である。主としてテュルク系の遊牧民を出自とするマムルークたちは、奴隷としてイスラーム世界にもたらされて後、様々な訓練を受けて軍人として採用された。13世紀から16世紀のエジプトとシリアでは、そうしたマムルーク出身者が支配者として君臨したのである。視点を社会に転ずれば、一般の人々もそうした奴隷を所有し得たし、奴隷から解放されて新たな道を歩み出す人々もいた。彼らは中世イスラーム世界を構成する、重要な要素のひとつであった。

知識人や商人、亡命者などが盛んに行き来していたことも、忘れてはならない。知識人については、もっぱらイスラーム世界内部の移動が多かったと見られるものの、往時の情報の移動や学問の発展に大きく寄与するものであった。インド洋をわたる商人たちもまた、人や物、情報の移動において必要不可欠な存在となっていた。大航海時代の遙か以前より、インド・東南アジア産の胡椒が彼らによってイスラーム世界へ運び込まれ、人々の生活に潤いを与えていた。紅海・インド洋交易においては、カーリミー商人がその代表的な例であろう。海をわたる商人によってもたされる新規な情報は、たとえば中世イスラーム世界を代表する説話集アラビアン・ナイトの成立に影響を及ぼした。

しかし、エジプトやシリアといった往時の中心地より遠く離れたイエメンにおいてどのような状況にあったのかという点については、これまで十分に検討されてこなかった。軍事奴隷であるマムルークのイエメン流入については既に専論があるが、それも事例紹介に終わるものであり、他の家内奴隷や奴隷身分にない自由人によるイエメン到来とその影響に関しては、未だ詳らかとなっていない。イエメンは紅海とインド洋を繋ぐ地に位置し、対岸には東アフリカを臨むなど、他地域とは大きく異なる特徴を有する。イエメンの状況を明らかにし中世イスラーム世界の中心地における状況との比較を通して既存の研究成果を相対化することで、往時の歴史を人々の流入との関連において総合的にとらえることがより一層可能となるだろう。合わせて、人間の移動がより盛んになった現代社会を考える上でも、本研究はひとつの材料

を提示するものと考えらる。

2. 研究の目的

中世イエメンへ流入した人々にはどのような特徴が見られ、他地域と比した場合にどのような共通性あるいは特殊性が認められるのかといった点を検討することを目的とする。史料上においては、支配者層と関係が強かった人々が特に記録されやすい傾向にあるため、まずはそうした人々に焦点をあてる。特に、未だ十分に検討されていない、ラスール家に仕えた家内奴隷を取り上げる。他、東アフリカより到来する知識人や商人についても分析を加え、中世イエメン社会の多様性あるいは流動性を探る。

なおここでの「中世イエメン」とは、ラスール朝(1229-1454)が同地を治めた時期、すなわち西暦13世紀から15世紀の頃のイエメンを指す。ラスール朝期には相対的に非常に多くの史料が著されており、人々の流入に着目した研究が可能である。もっとも「3. 研究の方法」で述べるように、本研究で用いるアラビア語文献にはラスール朝期前後に成立したものも含まれており、ラスール朝期に限らない時期の状況についても合わせて検討していく。

3. 研究の方法

関連する先行研究やアラビア語文献を収集・読解する。既に2010年にはフランス人研究者Valletが、東アフリカにおける交易状況に関する著作を著しており(引用文献)、本研究を進める上で重要な示唆を与えてくれる。近年になってイエメンの首都サナアの旧市街の住居で発見されたラスール朝行政文書集『知識の光』の記述を、特に詳しく検討する。また他にも、ラスール朝史料(年代記、人名録、農事暦、地理書、旅行記、行政文書州)を網羅的に参照し、流入した人々に関する記述を集め、考察を加える。これらの史料の成立時期は西暦10世紀から18世紀にまで及んでおり、ラスール朝史料を中心に据えつつも、前近代のイエメンの様子をある程度長期的に描きだすことが可能となっている。

ここでは特に、以下のテクニカルタームに着目する。いずれも、中世イスラーム世界において一般に奴隷を意味すると考えられる語であり、『知識の光』ではラスール朝宮廷を構成する一員として頻出する。イエメンにおける彼らの具体的な出自などの性格を検討した研究は、未だ見られない。: アブド(‘abd)、ジャーリヤ(jāriya)、ハーディム(khādīm)、タワーシー(tawāshī)、グラーム(gulām)、マムルーク(mamlūk)。

また「4. 研究成果」で詳述するように、

中世イエメン社会を考える上では東アフリカからやって来た人々の検討が重要となる。そのために、ラスール朝史料において東アフリカがどのように記述されているのかといった点を合わせて詳しく見て行くことで、さらなる分析が可能となる。

4. 研究成果

(1) 流入する奴隷たち

ラスール朝行政文書集『知識の光』においては、ラスール朝に仕えた人々に関する記述が豊富に見られる。それらの仔細について他史料の記述をもとに検討したところ、様々な奴隷が含まれていることが明らかとなった。具体的には、アブド（男性奴隷）やジャーリヤ（女性奴隷）、ハーディム（去勢者）などと呼ばれる人々が、ラスール朝スルタンの宮廷組織で働き、祭事には砂糖菓子（*shamsa*）の分配を受けていたのである。彼らはいずれも中世イスラーム世界の諸史料において頻出するが、ラスール朝史料においてどのような人々を意味していたのかという点については、実際に史料に即して考えるほかない。

彼らの出自に着目して史料の記述を追っていくと、関連する記述がほとんど見られない一方で、アデン港課税品目録やエチオピアにおける商業の記録において、アブドやジャーリヤ、ハーディムが売買されていた旨が記されている。また年代記や人名録においても、アブドやハーディムなどと呼ばれる人々が東アフリカ、特にエチオピアやザイラウから到来していたことを述べる記事が見られる。以上より、数的な検討は不可能なものの、ラスール朝に使えたアブドやハーディムは、もっぱら東アフリカからもたらされていたのではないかと推測されるのである。一方でジャーリヤについては、東アフリカ出身者の他に、北方からもたらされる者もあった。実際、ラスール朝のあるスルタンの母親はギリシャ系のジャーリヤであったと記録されている。

彼らのもっぱら家内奴隷として用いられており、軍事奴隷として活躍したことを明確に示す記事はない。ラスール朝下における軍事奴隷としてはマムルークの存在をあげることができるが、マムルークが東アフリカからもたらされた旨が記録されていない一方で、エジプトから運び込まれていたことを示す記事が見られる。ここには、東アフリカ出身の奴隷を家内奴隷として使用し、北方出身の奴隷を軍事奴隷として用いるという図式を見出すことができる。

去勢者であるハーディムは、ラスール朝支配者層の家内に宦官として仕え、女性の世話に従事したと考えられる。中には様々な教養を身につけ、実績を積み上げることで、タワーシー（宦官長）と呼ばれるようになった者

もいた。彼らは支配者層の女性を庇護するばかりではなく、騎兵隊を率いて軍事活動に従事したり、外部勢力の使者として派遣されたりと、ラスール朝支配体制を支える重要な役割を担うこととなった。経済的に裕福になったタワーシーの中には、学院やモスクを建設したりワクフを寄進したりするなど、イエメン社会に影響を及ぼす者も見られた。先行研究ではタワーシーの軍事的側面に着目する傾向にあったが、着目されるべき性質は東アフリカ出身の去勢者であったという点であり、だからこそラスール朝の女性を庇護するという重要な役割を担い、政治的に成功することが可能だったのだろう。

東アフリカ出身の奴隷は支配者層だけではなく一般の人々にも所有され、なかには高德の人として人名録に特記されたり、あるいはアカネを耕作して収入を得ようとしていた旨が史料に記されたりする人々もいた。イエメン山岳地域に居住する部族全体の所有物として記録される奴隷も観察される。

こうした奴隷たちのうちには、前代よりイエメンに居住し続けるアフリカ出身者たちとともにひとつの人間集団を形成する者もあった。イエメン海岸地帯であるティハーマには「ティハーマのアブド」と呼ばれるアフリカ系の人間集団が見られ、支配者層から免税特権を得たり、彼らの支配力が弱まったときには軍事的反乱を起こしたりと、イエメンの政治史で特記される活動を行っていた。現代イエメン社会には「ハーディム」と呼ばれるアフリカ系の被差別層が存在し、イエメン社会において政治的・経済的な意味での「底辺」を構成しているが、筆者はその起源のひとつはラスール朝下に成立した「ティハーマのアブド」にあると推測している。先行研究においては、彼らの起源を前イスラーム期のアクスム王国やイスラーム初期のエチオピア系の王朝に求めるものがあるが、その起源は単一ではなく、こうした「ティハーマのアブド」などを取り込みつつ、徐々に現在のハーディムを形成して行ったのではないだろうか。今後、「ティハーマのアブド」を詳細に検討していくことで、現代イエメン社会の成り立ちについても、新たな視座より分析を加えることが可能となるだろう。

他地域と比した際、イエメンならではの特徴を見出すことができる。東アフリカ出身の奴隷は、エジプトやシリアなどの他地域においてもしばしば観察される。これらの地域ではスラヴ人など北方由来の奴隷もまた活躍していたが、イエメンではそうした人々の流入を確認することはできない。その理由としては、イエメンがスラヴ圏より地理的に離れていること、東アフリカから供給される奴隷のみで十分であったことが想定される。他、同時代の他地域ではもっぱら奴隷を意味すると言われるグラームという語が、中世イエメンでは自由人を指す傾向にあるなど、史料における用語の使い方についてもイエメン

の特殊性を見ることができる。もっともグラムの語が主として奴隷を意味するという論調は、管見の限りでは、日本において特に顕著に見られるものである。アラブ圏の研究者も、フランス語圏や英語圏の研究者も、グラムが奴隷身分であると殊更に主張することなく、グラムの多義性を語る傾向にある。確かにアッバース朝やサファヴィー朝におけるグラム集団が奴隷身分によって主として成立しており、このことは日本人研究者によって特に強調される点であるが、同時に史料における多くのグラムが自由人をも内包していることをも念頭に置いておかなければならない。

一方で、外部より流入する人々が支配者層に取り込まれたり、社会の中に溶け込んでいったりと、他のイスラーム世界と同様の状況が起こっていたことにも目を配らなければならない。その理由を奴隷の積極的な利用と解放を認める「イスラーム」の体系に求めることは当然できようが、こうした奴隷の活用が前イスラーム期より行われていることを踏まえれば、むしろ相対的に経済発展に乏しかったアフリカ大陸という人的資源の宝庫に隣接するいわゆる中東地域の立地条件こそ、こうした歴史的事実の主因を見出す方が自然であろう。

なお本研究成果については、拙著『宮廷食材・ネットワーク・王権 - イエメン・ラスール朝と13世紀の世界 -』の第六章としてまとめられている。

(2) イエメンと東アフリカ

適度な接触を可能とする海を媒介としてつながり続けているイエメンと東アフリカの間では、過干渉は起こらず、結果として人や物、情報が限られた物量の中で相互に往来するにとどまったと考えられる。もっともそれらの流れは必ずしも平等ではなく、東アフリカからイエメンへもたされる人や物の方が、相対的に多かったと推測される(引用文献)。

そうした状況故、ラスール朝史料における東アフリカの記述は非常に限られている。それでもなお断片的な記事を探っていくと、前項で検討したような奴隷に加えて、様々な知識人や商人、亡命者が流入していたことが、史料に記録されている。中にはイエメンの知識人層と婚姻を重ね、東アフリカ出身者としてのアイデンティティーをその名前の中に残しつつも、新たな家系を成立させる者も見られた。他にも象牙やベルベル羊などの東アフリカの特産物がイエメンへもたらされていたが、その対価としてはおそらくは金貨やエジプト製の布などが東アフリカへわたっていたばかりである。また、東アフリカで生じた自然災害や火山の噴火に関する情報もラスール朝史料に特記されている他、イエメンで起きた産物の価格暴騰が対岸の東アフ

リカにも影響を与えたことを示す記事も見られる。

東アフリカからイエメンへ流入した人々は、こうした人や物、情報の流れの中の一欠片と言えるだろう。イエメンの支配者層であるラスール朝は、その強力な王権故に、近隣地域より人的資源を吸い上げることとなった。その状況は前イスラーム期以降、近年に至るまで、大きくは変動しなかったと読んでいる。東アフリカ出身者は、出身地にいた頃には願うべくもなかった経済的恩恵を、経済的に発展していたイエメンで享受することとなった。

なお本研究成果については、拙稿「ラスール朝史料における東アフリカ」としてまとめられている。

(3) 総括

このように中世イエメン社会には、特に東アフリカより流入する各種の奴隷や知識人が影響を及ぼしていた。北方よりやって来る奴隷の姿も確認されるが、その数は相対的に見て少なかったと推測される。

東アフリカ以外の非イスラーム世界から到来したと考えられる人々は、史料上にほとんど記されていない。ラスール朝行政文書集には、モゴルターイという名前を持った、モンゴル由来と考えられる軍人が登場する。また、インド出身の奴隷の話も出てくる。しかしこれらは、きわめて希な例である。

本研究では非イスラーム世界よりやって来る人々に特に焦点をあてたが、エジプトやメッカよりイエメンへ到来する知識人や商人、王朝の使節などが見られた。彼らについては、既に日本人研究者である家島彦一によって検討がなされている(引用文献)。本研究成果と合わせて考えれば、紅海とインド洋を結ぶ中継点に位置したイエメンは、イスラーム世界を流動する人々と、非イスラーム世界より越境する人々が交錯する、多様性に富んだ地であったとすることができる。

ラスール朝期以降もイエメンへは様々な人々がやって来ていたと考えられ、たとえばザイド派イマーム政権と東アフリカとの外交関係を取り扱った研究も登場している(引用文献)。しかしその影響力や出自などを通時的に取り扱った専論は見られない。その理由としては、オスマン朝の侵攻期に入ると重要史料がオスマン・トルコ語で著されることになったため、アラビア語とオスマン・トルコ語の双方を操ることが研究者に求められることが挙げられる。こうした言語的な垣根を超えた研究に、今後は積極的に取り組んでいかなければならないだろう。

なお近年においては、東アフリカのソマリアからイエメンへ流入する難民が政治問題となっていたが、2011年のいわゆる「アラブの春」に端を発するイエメン内戦以降には、東アフリカへ流入するイエメン難民が急増

した。ここには古来変わることのない、イエメンと東アフリカを緩やかに結ぶアラビア海の役割を見て取ることができるだろう。東アフリカに至ったイエメン人たちは、当地の社会においてどのように影響力を持っているのか。こうした現代の事象を歴史的な流れの中でとらえる上で、本研究はひとつの材料となると、執筆者は考えている。

<引用文献>

Vallet, E, *L'Arabie marchande: État et commerce sous les sultans rasūlides du Yémen (626-858/1229-1454)*, Paris: Publications de la Sorbonne, 2011, pp.871.

家島彦一『海域から見た歴史 - インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会, 2006, pp.968.

栗山保之 2012. 『海と共にある歴史 - イエメン海上交流史の研究 - 』中央大学出版部.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

馬場多聞「ラスール朝史料における東アフリカ」『史淵』154, 2017, 95-122. 査読なし

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

馬場多聞『宮廷食材・ネットワーク・王権 - イエメン・ラスール朝と13世紀の世界 - 』福岡：九州大学出版会, 2017, pp. 326.

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

馬場多聞 (BABA, Tamon)
九州大学・大学院人文科学研究院・助教
研究者番号：70756501

(2)研究分担者 なし
()

研究者番号：

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号：

(4)研究協力者 なし
()